

RACCOON 会報告

常務理事 今西淳子

Hanoi, Vietnam from May 3 to 5

ゴールデンウィークを利用して、5月3日～5日、三女瑞穂とベトナムのハノイを訪問した。1998年度奨学生のブ・ティ・ミン・チィさん（人間科学研究所研究員）とお嬢さんのマイちゃんが、市内観光やショッピングに連れて行ってくれた。また、ご主人のムイ先生が設立した、ベトナム初の私立大学のタンロン大学で、日本語を学習している学生さんと歓談する機会を作ってくださった。その後、日本留学の予備教育機関としてコンピューターや語学を教える新しい学校も見学した。このような事業がどんどん発展し、ベトナムから日本へ来る留学生が増えることを願う。



ムイ先生の
コンピューター教室



どうやってこの道渡るのかが問題



チィさん、ムイ先生と今西瑞穂

Boise, Idaho, USA on August 12

シンシナティで開催されたC I S Vの国際会議の帰り道、今西常務理事は 1996 年度奨学生の喬辛さん（アイダホ大学ポスドク研究員）を訪ねて、Boise というロッキー山脈の東側にある町へ行った。喬さんは、日本留学の後、カナダに移住して Waterloo 大学で数年間ポスドクの研究後、春にアメリカに移ったばかりだった。アイダホというとポテトだけでも、最近は、シリコンバレーの延長で、IT 産業が盛んになった。しかし、このご時世では、その勢いも陰り、レイオフも始まっているとのこと。Boise は、喬さんがずっと住んでも良いと思っているほど気に入っている、非常にきれいな落ち着いた町だった。

ハノイの道の渡り方

「赤信号、皆で渡ればこわくない」という言葉は、日本人の習性をよく表しているという。赤信号ならば、たとえ車が来なくても道を渡らないということは、外国人には不思議でたまらないらしい。周りを見回して誰もいなければ渡るとか、外国人が見ていると渡らないとか、最近日本人でも赤信号で渡る人が多くなったのは、日本人でも個人リスクをとる人が増えた証拠とか、いろいろな報告も聞こえてくる。

でも、ハノイの道の渡り方はちょっと違った。

5月の連休を利用して、元渥美奨学生のチィさんを訪ねて、ハノイに行ってきた。空港からのハイウェイの両側には、水田が広がり、ベトナム笠（三角の帽子）をかぶった農家の人たちが水牛を使って耕作をしており、典型的なのどかなベトナムの風景。一方、自動車をどんどん抜いていくバイクの運転仕方、そしてバイクと競争するようにクラクションを鳴らしながら走る自動車やトラックの運転仕方は喧騒そのもの。ハノイが近づくにつれてバイクと自転車の数がどんどん増えてくる。市内にはいれば、それこそバイクと自転車の洪水だ。私たちの乗っている車のすぐそばをすれすれに通りすぎていく。そのあまりの近さに最初はひやひやしたが、次の日にはすっかり慣れてしまっている自分を発見してさらにまた驚く。ヘルメットをかぶっている人がいない、2人乗りまでは合法ということだが3人乗りもいる・・・とは一緒に行った中学生の娘の指摘。排気ガスを吸わないため、口にスカーフを巻いている人や、日焼け止めに腕の長い手袋をしている女性も多かった。

さて、信号がそれほど多くないこの街で、自転車とバイクの流れを渡るにはどうしたら良いだろう。もし、東京のように、車が止まってくれるを待っていたら、永遠に道を渡れない。しかしながら、ある意味では、道の渡り方はとても簡単。どんな大きな通りでも、どんなに自転車やバイクが多くて、ただゆっくり前へ進むことだ。自動車やバイクや自転車は、あなたを見つけたら、必ずあちらがよけてくれる。スピードが20kmくらいだからできることなのだろうけど、「相手が私を認識したらもう大丈夫」という暗黙の了解と信頼が存在している。だから、とにかく自分の行きたい方へゆっくり歩く。むこうがよけてくれる。もしあなたが避けようとしたり、急に立ち止まったりしたら、それこそタイミングが狂って事故が起きるだろう。

10年ほど前に、北京に行った時、当時でも交通量が多かった故宮博物館の裏の大きな道を、絶妙のタイミングで皆が平気で渡っていくのを見てすごく感心した。その事を、後日日本で中国人の留学生に話したら、「まだ中国は発展途上で信号を守らないから」と言われ、私は文化の話をしていたつもりだったのに、経済社会発展の話になったのでちょっと驚いたことがあった。確かに、ハノイでも、そのうちもっと効率良く自動車が走れるように、もっと交通ルールも増えて、人々は青信号になるのを待って渡ることになるのだろう。そのうち、歩道橋などという、歩行者の権利を無視した物も作られるのかもしれない。

車が来なくても赤信号で道を渡らない秩序正しい日本であるはずだが、ニューヨークに住む私の知人は、「日本の道はこわくてしょうがない」という。何でも、歩道と車道の区別がなく、自動車と自転車と歩行者が一緒に通る道は、どこをどう歩いて良いかわからないという。そういえば、駅前商店街など、かなりの無秩序だ。でも、きつとこの状態はなくなるだろう。なくす必要もないのではないか。多くの日本人は、駅前商店街の人ごみに心地よささえ感じるのではないだろうか。道を広げ歩道が整備されるよりも前に、自動車が締め出されるだろう。それは、都市計画の不備なのか、財政上の問題なのか、はたまたそういう文化なのだろうか。

たとえ、どんなに経済が発展しても、ベトナムでは（そして相当多くの国々では）皆一緒でなくても、赤信号を渡る人はなくなるだろう。いつまでたっても、ベトナムの街には人が溢れ、活気があるだろう。いつまでたっても、一見無秩序の中で人々はたくましく生活しているだろう。ハノイはそんな強さを感じさせる街だった。

(2001年6月4日 SGRA 電子掲示板に投稿)

Raccoonkai in New Haven, USA Connecticut on August 26

Brown 大学へ入学した長女を送りに行く途中、ニューヘブンでラクーン会を開催した。町で一番評判の良い中華料理屋に、1997 年度奨学生の張紹敏さん（エール大学医学部研究員）ご一家、1998 年奨学生の孫艶萍さん（ハーバード大学医学部研究員）とお友達、1999 年奨学生の侯延昆さん夫人（ご本人は出張中）が集まってくれた。アメリカ生活も随分長くなる皆さんが、順調に研究を続けていらっしゃるご様子を聞いて嬉しく思った。



Raccoonkai in New York City on August 31

ニューヨークでは、1995 年度奨学生のミッシェル・バンプリングさん（メトロポリタン美術館研究員）と 1996 年度奨学生のメラニー・トレードさん（ニューヨーク大学美術史研究所助教授）と SGRA 会員のご主人ローレンツ・ビッヒラーさん（ニューヨーク大学客員教授）に、1999 年奨学生の許曉原さん（テネシー大学研究員）ご一家が連休を利用して駆けつけてくださり、17 丁目にある AZ という洒落たレストランでラクーン会を開催した。日本語と英語と中国語とドイツ語が交じり合い、いかにもニューヨークらしい一時を過ごした。

ラクーン会の前に、WTC から 2 ブロックしか離れていないミッシェルさんのアパートを訪問したが、それから 10 日後に、あのような惨事がおこるとは誰が予想できたでしょう。9 月 11 日、ちょうどご主人がご出張中だったので、ミッシェルさんは、幼いふたりの子供を連れて、命からがら、メリーランドのご実家へたどりついたということです。



この写真は NYC に住む友人が送ってくれたものです

Yangon, Myanmar from September 12 to 14

あの信じられない悲劇を東京の我が家のテレビで見たのはちょうどミャンマーへ行く荷作りをしていた時だった。次々にテロが襲い、いつまで続くのかと皆が不安になっている時、日本航空でミャンマーへ行くなら大丈夫と考えていた。<どちらかという、ミャンマーもグローバリゼーションから忘れられた国だから、テロリストの標的にはならない> ヤンゴンに着いたら、私を出迎えてくれた 1996 年度奨学生のキン・マウン・トウエさん（Ocean Resource Production Co.Ltd 社長）や、ガイドの N さんは有料チャンネルの CNN を見て知っていたけど、一般のテレビニュースでは NY の悲劇は放送されていないとのこと。平和というか、何というか。キンさんは相変わらず忙しそうなので、私はヤンゴン郊外の観光を楽しんだ。



右上がキン・マウン・トウエさん事務所の入居ビル

広州レポート

12月27日～30日、中国教育部留学服務中心（中国の文部省所管の留学サービスセンター）の招待を受け、「第4回中国留学人員科学技術交流大会」を視察するため、広州に行った。

飛行機が遅れて空港からレストランへ直行したが、夕食の後「広州の夜景」を見に早速街へ。それで驚いた。道の広いこと。発展の早いこと。高層ビルが林立する新開発地域は、数年前までは畑だったという説明ばかり。高級住宅地は、大きな一戸建て住宅のコミュニティーが塀で囲まれ、入り口には警備員がいる。何もかもが新しい。ごみがない。ホームレスがない。何でも、仕事が見付からない人は、強制的に田舎に帰されるとのこと。犯罪も殆どないようだ。金箔のビルなんかもあって、ちょっと趣味を疑うところもあるけど、一般的には、高層アパートビルの設計も画一的でなくて、いろいろな変化をつけてあり、赤や緑系統のパステルカラーをとところどころに使って、なかなか良いデザイン。ただし、建設施工の品質管理は、ちょっと疑問。翌日、私立小学校を視察したが、9月にできたばかりという建物のわりに、壁は汚れているし、金属に錆びはきいているし、本当に新築？とびっくり。そういえば、2ヶ月前にできたばかりという市の体育館のまわりのコンクリートにも、かなり大きなひびがはいっていた。そうみていけば、最高級ホテルの床の大理石の張り方まで気になるけど、日本の建築と比較する方が間違っているでしょう。

それにしても広州の街路樹や路肩の植え込みは本当に素晴らしい。高速道路の下まで、ぎっしり草が植えてあり、スプリンクラーで水をまいている。さらに、もっと驚いたのは、駐車スペースに、コンクリートをべたうちしないで、花柄に穴をあけて芝生を植えたり、格子状の枠を作って中に草を植えたり、つまり雨水が地面に染み込むような工夫をしている。これは、SGRAフォーラムで、環境にやさしいドイツの再開発の例として紹介されたものではないですか！中国の方によれば「広州より深せんの方がもっと綺麗、空気も綺麗」とのことだけど、ここ数年間に整えられたという広州の道路沿いの植栽は本当に綺麗だと思ったし、空気が悪いとも感じなかった。東京の春や秋のような素晴らしい気候。広州の印象があんなに良かったのは、この天気のおかげかもしれない。

そして「食は広州にあり」ですから。一般的に日本人の口に合う。海鮮料理が多く、店の前に水槽をおいて、様々な魚や貝類がおいてある。ついでに籠にはいった蛇も。蛇は今が一番美味しい季節とのことだから食べないわけにはいかない。鶏の足、白鳥の足、子豚の足、黒い鶏、いずれも大御馳走ということで、ご招待だから食べないわけにはいかない。ということで、いろいろなものを食べました。もっとも、こんなに食が豊かな広州でも、街には、マクドナルドとか、ケンタッキーフライドチキンとか、回転寿司とかあって、「中国人は中華料理しか食べない」というのは、変わりつつあるようだ。

中国留学人員科学技術交流大会は、①海外に留学した中国人が国に帰って創業すること（帰国創業）と国のために奉仕すること（為国服務）の促進、②国内外のハイレベル科学技術成果・人材の交流の促進、そして、③科学技術・教育を持って国を振興させる（科教興国）戦略の実施の促進、を目的に開催されるそうで、要するに、IT、バイオなどを専攻する理工系留学生を国に呼び戻そうという試みである。中国の国家科学技術部（=科学技術庁）、国家教育部（=文部省）、国家人事部（=人事院）、広東省と広州市が主催という大々的なもので、広くて新しい広州市の体育館で、ブースによる各教育関係機関や大学や留学生会の紹介と、パネルによる世界に散らばる理工系の学生自身の広告、そしてホテルでの世界の最先端技術の紹介セミナー等のプログラムがあった。昨年までは、科学技術部だけの主催で参加者も600名程度だったが、今年からは国家をあげての催物となり、今年の参加者は2500名とのこと。世界各地の大学に留学して理工系の学位をとった中国人留学生だけです。

案内してくれた2000年度奨学生の曾支農さん（アジア太平洋国際交流協会社長）によれば、中国のシステムでは、インフラ整備は簡単。高速道路を作ることなんか、力のある官僚ならば電話一本でできる。これからは、国のシステム作りのためにソフトが問題。政府は、海外にいる優秀な人材を優遇して呼び戻す政策になったとのこと。渥美財団では、設立以来8年間に30人を越す中国人留学生を支援したが、今までに帰国したのは1名。毎年帰国しない事情を聞くが、主に中国側の人脈が強い受入体制に止むを得ない理由があるように思う。ところが、今年の奨学生の範建亭さん（一橋大学大学院）は、「東京よりも上海の方がはるかにチャンスが多い。博士が終わったら、とにかくすぐに帰国します」と言う。また、京都大学の佐藤進教授は、帰国した留学生を訪ねることを楽しみにしているが、最近の大きな変化は、上海に行ったら帰国留学生数名が社長になっていて、先生を歓待してくれたそうだ。私は、必ずしも留学生が母国に帰って母国の発展のために尽くす必要はないと思っているが、自分の生まれた国により大きな可能性を感じて、母国の発展に寄与できるのは素晴らしいことだと思う。日本よりも政府の政策の効果が高い土地柄であるはずだから、今後中国に帰国する留学生が増えていくだろうと期待する。

日本では比較的元氣な私でさえ、わずか3日間の滞在だったのに、中国のエネルギーに圧倒された。勿論、今回私が行った広州や深せんは、広大な国土と13億人の人口（通貨統合をしたヨーロッパは、全部でたったの3億人ですよ！）をかかえる中国の中で一番発展しているところだが、田舎との経済格差や様々な問題を指摘するまえに、20年前の自転車の洪水だった中国からの発展ぶりを素直に賞賛したいと思う。（あの時の無数の自転車はどこに消えたの？）

(1月8日 e-sgra に投稿)

Raccoonkai in Seoul on October 22



第1回日韓合同ワークショップに出席するためにソウルを訪問中、ソウルのホットスポットである江南タワーの中華料理レストラン CATHAY HO! でラクーン会を開催した。1995年度奨学生の朴哲主さん（三育義明大学校流通経営学科専任講師）、1996年度奨学生の李來賛さん（通信政策研究院公正競争研究室専任研究員）、金雄熙さん（仁荷大学校経済通商学部国際通商学専任講師）、日本から来訪した南基正さん（東北大学大学院法学研究科助教授）、2001年度奨学生の李炫瑛さん（韓国外語大学校日本語学科非常勤講師）が集まり、21世紀日本研究グループの韓国国民大学の李元徳助教授と学生さん2名も一緒に、同行の渥美財団嶋津忠廣事務局長、発表者の2000年度奨学生の林泉忠さん、2001年度奨学生ボルジギン・ブレンサインさん、それに今西の12名で、賑やかな一夜を過ごした。ワークショップを含めてずっと幹事の大役を勤めてくださった金雄熙さん、素敵なお店を紹介してくださった李來賛さん、韓式朝食に毎朝連れて行ってくださった南基正さん、市内を案内してくださった李炫瑛さん、ありがとうございました！

ワークショップの後の10月25日、1997年度奨学生の李香哲さん（光云大学校日本経済論近現代日本経済史教授）とソウル市内のホテルでお会い、研究の様子やご家族の様子等を伺った。

Raccoonkai in Hong Kong on December 30

広州から深せんへ行き、そのまま香港から帰国することにしたので、2000年度奨学生の林泉忠さん（2002年4月より琉球大学専任講師）に、国境？まで迎えに来てもらった。それにしても同じ国のはず

なのに、深せんに入る時、香港にはいる時、パスポートチェックがあるのは不思議。深せんと香港の国境？は、世界で一番混雑していて、2時間くらい並ぶこともあるという。別にチェックが厳しいわけでもなく、係の要領が悪いわけでもないが、とにかく人が多いからということらしい。

面白いのは、広州、深圳、香港の順で、町があかぬける。たとえば、女性の服装、女性のお化粧品、ブランド品の店の数、お店のディスプレイなどなど。やっぱり少しずつ違う。広州は凄いと思ったけど、やっぱり市民レベルの文化が変わっていくには、それなりの時間がかかるのではないかと思う。

飛行場へ向かう前に、林さんに飲茶に連れていってもらった。香港で今話題のお店ということで、新しいショッピングモールの2階にあるとてもモダンなインテリアの店。香港の飲茶というと、街角の雑然とした店をイメージしていたので、ここでもカルチャーショック？<東京と全然変わらない！>日曜日のお昼、お店は家族連れで満員だった。香港は空前の不景気と聞いていたが、空港も空港までのエクスプレスも、非常にモダンな大都市でありました。

Manila, Philippines From March 30 to April 7

私が理事を勤める子供の国際キャンプの組織、C I S Vのアジア太平洋地域ワークショップのために、マニラを訪問した。1995年度奨学生のフェルディナンド・マキトさん（テンプル大学ジャパン客員講師）が、東京から来て案内してくれた。



マキト家の子供達のコラージュ
(レニーとチンの共同制作)

私にとってフィリピンは捉えにくい。欧米の宗教と文化をそっくり受け入れ、教育程度も高く、英語力も極めて高い。（フィリピン人の学者はアメリカ人の学者よりも良い英語を書くとか！？）第二次大戦後

世界銀行は、アジアの国の中で、フィリピンが一番成長するだろうと予測した。それが何故、今でも発展途上国なのか・・・

フィリピンといえば大家族、そして出稼ぎだが、マキト家もその例に漏れない。ワークショップに参加していた長男勇人と一緒に、イースターのお祝いにお家に招待してくださり、マキトさんの兄弟とたくさんの甥や姪が歓待を受けた。兄弟が近くや一緒に住んでいて、外国に住んでいる妹の子供達も一緒に暮らしている文字通りの大家族。

しかしながら、お父さんは、世銀関係の仕事でウズベキスタン。長男（マキトさん）は東京で大学の先生。次男はカナダのトロントで会社勤め。ひとりの妹はロンドンで看護婦さん。そして、一番上の妹も家族と一緒に、カナダに移住することを決めたという。フィリピン人が世界中に出稼ぎする最大の理由は、勿論給料の格差が原因といえるだろうが、英語能力の高さと、欧米文化に対する抵抗感の無さ、そしてフィリピン人特有の寛容さがそれをさらに容易にしているのではないかと思う。

さて、CISVのワークショップを抜け出して、7月のSGRAフォーラムで講師をお願いしているアジア太平洋大学の **Bernie M. Villegas** 先生にご挨拶に行った。経済学者の先生がアメリカ留学からもどり仲間と一緒に作ったシンクタンクが、今や大学に成長したという。機関銃のように早口で、用件だけばりばりお話しになり、フィリピンのワークショップでちょっとのんびりしていた気分が吹っ飛んだ。



マキトさんは、10年ぶりに、大学院時代の恩師に再会したそうだが、秘書の方に、「ちょっと親子みたいになったね」と言われていた。

別れ際、世界中に散らばるマキト一家のことを聞いてから、先生は私に「フィリピン人は本当にグローバルでしょう」と仰った。

Raccoonkai with Rijicho in Paris on May 1



ヨーロッパ旅行中の渥美伊都子理事長は、パリでOECDに勤務している2000年度奨学生のマルギット・モルナールさんに連絡して、ホテルで朝食を共にした。ハンガリー出身のマルギットさんは、ロシアや中国や日本に留学していたので、語学の達人。慶應義塾大学で、アジア通貨危機の時のインドネシアについて研究し、今もアジア経済の調査を続けている。日本の経済は世界の中では、そんなに悪くないのに、過小評価されているので、もっと自信をもって良いのではないかと思うと話していた。だいぶパリにも慣れて、楽しく過ごしているように見受けられた。

* * * * *

世界各地で活躍している元奨学生の皆さんにお会いするのは、留学生支援という仕事冥利に尽きます。ラクーン会の輪がもっともっと広がっていくことを望んでいます。



ラクーン会は、渥美奨学生の同窓会で
その名前は故渥美健夫氏の手遊びの狸の絵に因みます